特集

女性が輝く社会に向けて

環境保全に取り組む女性にフォーカス

環境に敏感な女性の視点を生かそう!

現在、さまざまな分野で「女性が輝く社会」の実現に向けた動きが活発になっています。では、環境分野ではどうなのでしょう? 今回は、NGO・NPO、研究者、企業という異なる立場の3名にお集まりいただき、環境保全活動における女性の役割や課題、そして活動をさらに発展させるためのヒントなどについて伺いました。

鼎談

本鼎談は、2016年11月24日、
廣告社株式会社(東京・銀座)の会議室で開催された。
左より、萩原なつ子さん(立教大学社会学部教授)、
中村玲子さん(ラムサールセンター事務局長)、
飯塚優子さん(住友林業株式会社CSR推進室長)

意思決定の場でも増やしたい女性の数

—最初に、ご自身の環境問題との関わりを簡単にご紹介ください。

中村 NGO活動を始めて30年になります。大学を出てメディア関係の仕事をしていた1980年代、バードウォッチングがはやり始め、たまたま行った日本野鳥の会の催しでハマりました。最初は趣味でしたが、メッセージを発信する仕事をするなら、もっと積極的に関わろうと、日本野鳥の会のスタッフに。4年間勤めた後、「ラムサールセンター」を設立したのが90年です。

萩原 私の場合、最初は環境というより公害問題ですね。くしくも、私が生まれた56年は水俣病が発見された年。小・中学校時代は連日、公害問題が報道されていました。大学進学のために上京して驚いたのは、東京の水のまずさ。水が飲めず清涼飲料水ばかり飲んでいて体調を崩しました。「内なる自然の破壊」を経験したのです。そこから食品や農業、開発問題へと関心が広がっていきました。

もう一つの大きな出合いがエレン・リチャーズ・スワロー(※1)の伝記。彼女は「エコロジー」を学問として成立させ、ライフスタイルを変えなければダメということを100年も前に提言した人です。

飯塚 大学時代、レイチェル・カーソン(※2)の出身校に1年間留学し、『沈黙の春』を読んだ思い出があります。環境との関わりは10年ほど前、当時在籍していたソニーのCSR部に異動してから深まりました。私は環境一筋ではないのですが、その分、外部からの視点が生かせるのではと考えていて、現在は住友林業で、企業経営の中でいかにCSRと事業を一体化していくかに取り組んでいます。

—環境活動における女性の立ち位置はどう変化してきたのでしょう。

中村 はっきりと感じるのは、活動する女性の数が増えたことです。でも、行政との少し大きな会議になると、出席者が全員男性という傾向はつい最近までありました。

萩原 そう、意思決定の場になると、なぜか女性がいなくなる。NPO法ができて約20年、現場では女性が活躍しているけれど、組織のトップとなると男性が多い。

中村 それは、職員に給料を払えるぐらい大きな組織になると、家族を養う立場にある男性の職業となり得るからではないでしょうか。

萩原 アメリカのエコフェミニズムの本の中に「雄鹿がやってきて雌鹿を蹴飛ばす」という言葉があって、すごく印象に残っています。環境がビジネス、つまり金もうけになると分かると、男性がやってきて女性を周辺に追いやるという構図ですね。

飯塚 私は男女雇用機会均等法後の世代で、女性だからダメといった経験をしたことはありませんが、「生徒会長は男子で、書記は女子」といったパターンは今でもあって、「私はこのポジションで十分」と女性が最初から遠慮してしまう。若い世代でも、なぜか小さくまとまってしまう傾向があり、気になっています。

環境活動を支えた女性の生活者としての視点

—環境活動において、女性はどのような役割を担ってきましたか?

萩原 例えば、石垣島新空港建設問題では、おばあたちが海を守るために立ち上がりました。守りたいのはサンゴ礁だけではなくて、海そのものなのだと。石垣島のおばあたちにとって海は命の源であり、ネイティブアメリカンの言葉でいえば「未来からの借り物」であると。つまり、それを壊すことは子どもの未来の可能性を奪うことになるわけですね。そこに、女性ならではの視点があります。

飯塚 石垣島で暮らす方々は、生態系という言葉は使わなくても、一つ崩れると全体に影響を及ぼすことが肌で分かっていたんですね。

萩原 琵琶湖石けん運動(※3)も、北九州の「青空がほしい」もそうです。毎日の生活の中で気付きがあり、女性はお金には代えられない価値を守ろうと頑張った。

飯塚 価値というのは、どういう時間軸でモノを捉えるかにもよりますね。弊社では、新入社員全員が社有林のある別子銅山(愛媛県新居浜市)に登ります。一時は煙害や過伐採で荒れた山になっていたのを植林で再生させた場所です。そこで、120年も前に植えた木を目の当たりにすると、「時間」を感じずにはいられません。まさに、自然は未来からの借り物であり、私たちには未来に対する責任があると実感できるのです。長い時間軸でモノを捉える感覚を身に付けることができた、わが社の社員はラッキーだと思います。

中村 女性が環境活動に熱心になれる背景には、しがらみのなさもあると思います。どこまで一般化していいか分かりませんが、女性は男性のように家の名前を守ったり、社会的な地位を気にすることが少ないため、こうと決めたら突っ走れる。

萩原 一家の大黒柱と思っていると、頭の中がお金でいっぱいになってしまうけれど、最近は、男性でも自分の生活を大切にしながら働きたいという人が増えているので、ここはチャンスかもしれません。

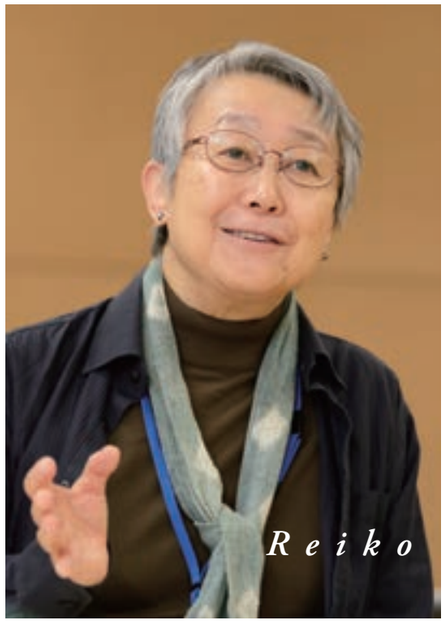
中村 女性でも、猛烈なスピードで動くビジネスの最前線にいれば、「環境のことは気になるけど、できないわ」となってしまう。

飯塚 男性・女性という話になったとき、私がいつも思うのは、専業主婦がいる世帯パターンはここ数十年にすぎないということ。かつて女性は家の商いを手伝うなど、普通に仕事をしていました。歴史的に見れば、専業主婦という存在の方がまれではないでしょうか。

萩原 高度経済成長時代は、その方が都合がよかったのね。

飯塚 住友林業は、まだ女性社員数が少ないのですが、女性が活躍するシーンは徐々に増えています。例えば、産業廃棄物削減や省資源といった課題。短期間に大きな結果を求めがちな男性に比べ、女性

国内で活動するNGO・NPOも足元だけでなく、時々は「世界という空」を見上げてください。



中村玲子

ラムサールセンター
事務局長
(なかむら・れいこ)

1970年に東京女子大学を卒業後、新聞社などで編集業務に従事。90年にラムサールセンター設立。事務局長として国内、アジアを中心に活動。2005年にアジア地域でのラムサール条約の普及・啓発活動などが評価され、日本人で初めて「ラムサール湿地保全賞」を受賞。

Reiko Nakamura

※1
【エレン・リチャーズ・スワロー】
Ellen Henrietta Richards Swallow(1842~1911)
アメリカ初の女性職業化学者。環境教育や公衆衛生学、家政学、消費者運動を生み、各分野の「母」と呼ばれるパイオニア。

※2
【レイチェル・カーソン】
Raychel Louise Carson
(1907~1964)
アメリカの海洋生物学者・作家。1962年出版の『沈黙の春』で、合成化学物質の大量使用による危険性を訴えた。

※3
【琵琶湖石けん運動】
1977年、琵琶湖に淡水赤潮が発生。その原因の一つであるリンを含む合成洗剤の使用をやめ、粉石けんを使おうと訴えた運動。

ラムサールセンターが協力している東インド・オリッサ州で現地NPOが開催した環境教育プログラム
写真提供:ラムサールセンター

萩原なつ子

立教大学社会学部 教授
21世紀社会デザイン研究科 教授
（はぎわら・なつこ）

明治学院大学英文学科、同社会学科卒業後、お茶の水女子大学大学院修士課程修了。財団法人トヨタ財団アソシエイト・プログラム・オフィサー、宮城県環境生活部次長、武蔵工業大学環境情報学部助教授などを経て現職。認定特定非営利活動法人日本NPOセンター副代表理事。専門分野は環境社会学、非営利活動論、ジェンダー研究。

Natsuko Hagiwara

私の専門は「環境と女性学」。
この学問の枠組み自体が
不要となるような社会をつくりましょう！

は小さなことをコツコツやり続けて成果を出す。小さなアイデアや積み重ねが大事なんですね。

萩原 イギリスに「女性の環境ネットワーク（Women's Environmental Network）」という団体があり、そこのモットーは"Small decision making will change the world"、つまり、小さな政策決定が世界を変えるということ。日本でもやっとエシカルコンシューマー（※4）が話題になっていますが、何を買うかという小さな政策決定、小さなことの積み重ねが社会を変えてきたのです。

中村 環境の側面から生活者の視点を考えると、かつては生活の場に豊かな自然があったから、気付けた。東京でもモズがいたし、雨の日にはアジサイの葉をひっくり返してカタツムリを見付けて遊ぶこともできました。

飯塚 去年採れた木の実が今年はないとなれば、環境の変化に気付きますよね。でも、今の子どもたちは、コンビニの商品ラインアップの変化ぐらいしか分からないかも。

萩原 だから、環境教育が始まったのです。昔は毎日が環境教育であり、自然体験でした。

中村 気付きの物差しがなくなった今、それを子どもたちにどう与えていくか、これは課題ですね。

開発途上国での支援は環境保全＋所得向上で

—開発途上国ではどうでしょう？

萩原 現在、「環境と女性」といったとき、課題の中心は開発途上国になるでしょう。というのも、開発途上国では森で拾った薪で煮炊きをしたり、水くみなどの役割は女性が担うため、環境の変化に敏感にならざるを得ないからです。

中村 東インド・オリッサ州の現場の例でいえば、男性は漁に出てしまうので、NGO・NPOが行う環境プログラムの受け手、あるいは実践者は圧倒的に女性です。CO_2をほとんど排出しない生活の中でも環境負荷を減らそうと行動する彼女たちに接すると、電気をふんだんに使っている日本のあり方が恥ずかしくなります。彼女らは小規模な養蜂を行い、家計の足しにするといったことにも積極的に取り組んでいます。

萩原 インドといえば、「チプコ運動」（※5）。木を切られると暮らしが成り立たないと、木に抱きついて伐採を阻止。彼女らは命懸けでチェーンソーに向かっていきました。

※4
【エシカルコンシューマー】
倫理的消費者という意味で、人権や環境、動物などに配慮して生産された商品を選択、購入するという消費者活動。

※5
【チプコ運動】
1970年代初め、北インドのウッタラカンド州で始まった森林保護運動。チプコはヒンディー語で「抱擁」という意味。

女性たちは森林伐採に抗議し、木に抱きつく「チプコ運動」を展開
©福岡アジア文化賞委員会

飯塚優子

住友林業株式会社
CSR推進室長
（いいづか・ゆうこ）

1992年津田塾大学学芸学部卒業後、ソニーに入社。広報、IR、海外などを経て、CEOのスピーチライターを務めた。CSR部でSRI（社会的責任投資）対応を担当し09年退社。外資系企業を経て、2012年住友林業株式会社入社。15年4月より現職。

Yuuko Iizuka

組織や活動の発展には、
女性や若者など従来にはない
「多様性の獲得」が欠かせません。

飯塚 開発途上国では所得向上への支援も重要で、弊社もインドネシアで地域の方々をサポートしています。苗を無償提供し、育った木の買取保証をするとともに、アグロフォレストリー（※6）を支援。そうすることで、違法伐採や焼畑が防げるし、ビジネスとしても原材料の安定調達が可能となり、W-in-Wの関係が築けます。

萩原 余談ですが、過去に実施した所得向上プログラムに鉄則がありました。それは、商品を男性に売りに行かせないこと。男の人は、手に入れたお金でお酒を飲んじゃうから（笑）。女性は子どもの教育費に使うんですけどね。

飯塚 バングラデシュのグラミン銀行が行うマイクロファイナンスも女性が対象ですね。

萩原 はい、インドのSEWA（Self Employed Women's Association：女性自営者協会）もそうです。

今後の支援のあり方は？出席者からの提言

—最後に、地球環境基金やNGO・NPOの活動のあり方について、ひと言お願いします。

萩原 地球環境基金の創設期にアドバイスをしたり、EPO（環境パートナーシップオフィス）の設立にも関わりました。基金さんの、NGO・NPOを主体とした協働事業への支援に果たす役割はますます大きい。「環境的公正」と人権などの「社会的公正」を同時達成するような活動への支援を期待しています。

中村 開発途上国のNGO・NPOへの支援を強化してほしいですね。地球環境基金の助成の枠組みでいえばイ案件やロ案件（※7）ですが、イ案件でも日本のNGO・NPOが全部お膳立てするのではなく、カウンターパートを育てたり、現地住民のキャパシティービルディングにつながる支援であればと思います。

飯塚 企業としては、NGO・NPOとの連携・協働はとても大事だと考えていますが、環境保全活動で成果を収めている団体でも、例えばマネジメント力が弱いために、自立が難しいといった現場を目にします。それぞれ得意分野があると思うので、団体間で弱点を補完できるような連携ができれば、企業はもっと支援しやすくなります。この点を含めて、基金さんには広く情報発信をしていただけるといいですね。

—本日はお忙しい中、貴重なご意見をありがとうございました。

※6
【アグロフォレストリー】
植林し、その樹間で家畜や農産物を飼育・栽培する農林複合経営。農業をしながら森を再生する手法として注目されている。

※7
【イ案件、ロ案件】
両案件ともに開発途上地域の環境保全活動に対する助成だが、イ案件は活動主体が国内民間団体、ロ案件は海外民間団体という違いがある。

住友林業がインドネシアで地域住民へ植林指導などを通して実施する社会林業
写真提供：住友林業株式会社

女性が輝く社会に向けて